エトパベート　本品についてエトパベート（$C_{12}H_{15}NO_4$）約６㎎を含む量を有効数字３桁まで量り、その数値を記録し、けん化フラスコに入れ、クロロホルム100mLを全量ピペットを用いて加え、還流冷却器を付け、水浴上でクロロホルムが蒸発しないように注意して15分間還流する。放冷した後、ろ過し、ろ液50mLを全量ピペットを用いて量り、分液漏斗に入れ、炭酸ナトリウム溶液（１→20）25mLずつで３回、次に、水10mLずつで２回洗い、洗液は捨てる。クロロホルム層をろ過し、ろ液10mLを全量ピペットを用いて量り、水浴上でほとんど蒸発し、その後、メタノール10mL及び１mol／Ｌ水酸化ナトリウム試液10mLを加え、水浴上で蒸発乾固する。これに熱湯10mLを加え、15分間加熱し、放冷した後、100mLの全量フラスコに入れ、１mol／Ｌ塩酸20mL及び水を標線まで加えて100mLとした後、ろ過し、試料溶液とする。別に、エトパベート標準品を乾燥し、その約0.03ｇを0.0001ｇの桁まで量り、その数値を記録し、メタノールを加えて溶かし、100mLの全量フラスコに入れ、更にメタノールを標線まで加えて100mLとし、この溶液10mLを全量ピペットを用いて量り、50mLの全量フラスコに入れ、メタノールを標線まで加えて50mLとする。この溶液10mLを全量ピペットを用いて量り、１mol／Ｌ水酸化ナトリウム試液10mLを加え、以下試料溶液の場合と同様に操作し、標準液とする。また、別に、メタノール10mLを量り、１mol／Ｌ水酸化ナトリウム試液10mLを加え、以下試料溶液の場合と同様に操作し、空試験液とする。

50mLの全量フラスコ⑴から⑶までを用意し、⑴に試料溶液を、⑵に標準液を、⑶に空試験液をそれぞれ25mLずつ全量ピペットを用いて量り、50mLの全量フラスコに入れ、それぞれにつき、次の操作を行う。１mol／Ｌ塩酸５mL及び新たに調製した亜硝酸ナトリウム溶液（１→1,000）５mLを全量ピペットを用いて加え、振り混ぜた後、２分間放置する。次に、新たに調製したスルファミン酸アンモニウム溶液（１→200）５mLを全量ピペットを用いて加え、振り混ぜ、３分間放置した後、新たに調製したＮ―（１―ナフチル）―エチレンジアミン二塩酸塩溶液（１→1,000）５mLを全量ピペットを用いて加え、振り混ぜ、10分間放置し、さらに、水を標線まで加えて50mLとする。⑴及び⑵の溶液につき、⑶の溶液を対照液として波長540nm付近の極大波長における吸光度A_T及びA_Sを測定する。

エトパベート（$C_{12}H_{15}NO_4$）の量（㎎）
＝エトパベート標準品の量（㎎）$\times\frac{A_T}{A_S}\times\frac{1}{5}$

スルファキノキサリン　スルファキノキサリン（$C_{14}H_{12}N_4O_2S$）約0.05ｇを含む量の本品を有効数字３桁まで量り、その数値を記録し、水70mL及び0.5mol／Ｌ水酸化ナトリウム試液10mLを加え、10分間振り混ぜた後、250mLの全量フラスコに入れ、水を標線まで加えて250mLとする。これを２分間放置し、必要ならば遠心分離した後、上澄液10mLを全量ピペットを用いて量り、１mol／Ｌ塩酸10mLを入れた200mLの全量フラスコに入れ、水を標線まで加えて200mLとし、試料溶液とする。別に、スルファキノキサリン標準品を乾燥し、その約0.05ｇを0.0001ｇの桁まで量り、その数値を記録し、水70mL及び0.5mol／Ｌ水酸化ナト